



『できる日本語』と出会って U-ToCが変わったこと

浜松市外国人学習支援センター(U-ToC)

日本語講師 針山 摂子

浜松市外国人学習支援センター(U-ToC)

2010年1月

多文化共生施設として浜松市が設立

⇒ 外国人市民のための日本語教室を開設

U 雄踏の **T**odo Mundo みんなの **C** センター

1. 開設時の方針

日常生活で日本語によるコミュニケーションが必要な場面を抽出し会話に重点を置いた教室
(会話クラス)

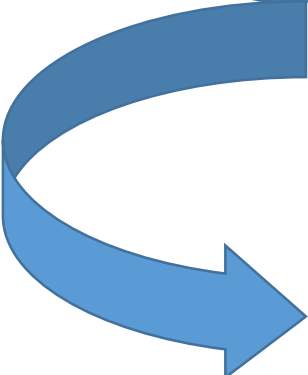


- ① 場面シラバス
- ② テキストは使わない
- ③ 教師がカリキュラムを考える

2. 教師の悩み



- * どんな場面が必要？
- * 文法はどうする？
- * カリキュラムが決まらない
⇒⇒ とりあえずやってみよう

- 
- * 教師がやりたい授業
 - * 1回ごとつながりのない授業
 - * 学習者に予習・復習の材料がない
⇒⇒ これでいいのかな・・・？

3. 『できる日本語』との出会い

2010・6 嶋田和子先生 来センター

2011・4 『できる日本語 初級』 刊行

タスク先行

文法と場面の融合

⇒⇒ 私たちの悩みが解決できる！

2012・4 部分的に使用スタート

4. 試行錯誤の時期



「あおぞら日本語学校」が舞台

地域の学習者には向かないかも？

- 文法をピックアップ
- 「地域」に合わせて作り替え
- 「できる…」のコンセプトが生かされない
- 教案作りの苦労も変わらない

第9課 ST2 『できること できないこと』

学習目標: 情報をもとにできること、できないことを話すことができる

utocカルチャースクール
~utoc Culture School~

3月2日(金)オープン!



連絡先: はりやま (090 ★★★★★ ★★★★★)

新しいカルチャースクールが
始まります。
皆さん、手伝ってください。
〇〇さんは何ができますか。

5. 新しい日本語教室へ

2013・4 正式にテキストとして採用

⇒ コース、カリキュラムを一新

⇒ U-ToC日本語教室のターニングポイント

◆このとき教師は・・・

△ 学習者も教師も戸惑った

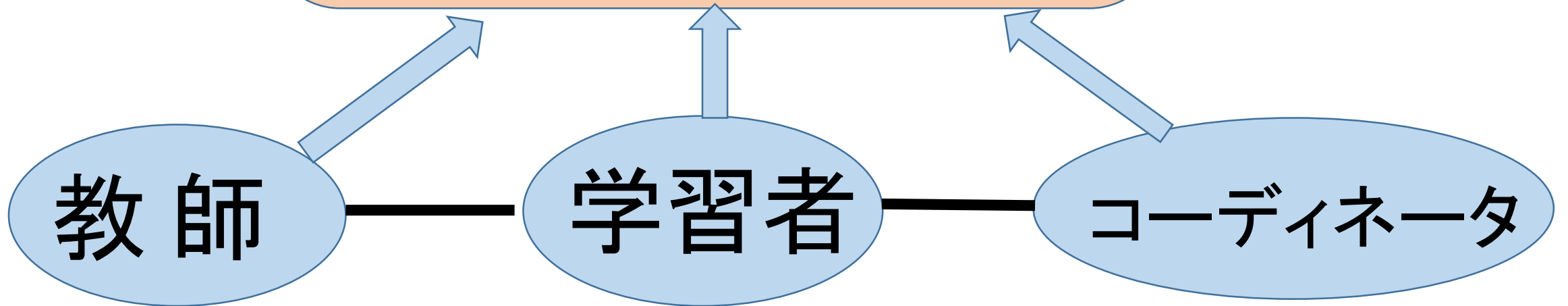
◎ 授業の目的が明確で授業がやりやすかった

自分のことを伝える力
伝え合う・語り合う日本語力
人とつながる力

教師

学習者

コーディネータ



6. 教師の気づき・変化

- ① 『できる』は学習者を選ばない
- ② 一貫したカリキュラムで繋がる授業
- ③ 場面と文法の融合を実感できた
- ④ 教師間フィードバックが活発になった
- ⑤ 『できる』のコンセプトが教師のビリーフに

7. 学習者の変化

- ① 発話と対話が増えた⇒教室外の交流も
- ② 学習意欲と継続性がアップ
- ③ 自己学習の時間が増えた(文法ノート)
- ④ 地域とつながる活動に参加

8. 実践を支える力

- ① 勉強会（嶋田先生、EWの先生方）
[イーストウェスト日本語学校]
- ② 他校の先生方との情報交換
- ③ 組織（U-ToC）によるサポート

9. これからも続くチャレンジ

『できる日本語』をより良く使うために

⇒ 各ステップの目的を理解して実践

⇒ 授業アイデアの検討・共有



自主勉強会の開催・授業見学

U-ToC日本語教室 講師の皆さんの声

Aさん：適切な場面設定のおかげで負担が減りました。ダニエルさんが既婚者なのが良い工夫だと思います。学習者にとって自分の生活とテキストの場面に共通点多ければ多いほどやる気につながると思います。

Bさん：勉強したことばや文型を使って会話している学習者を見るとうれしくなり、教師が楽しければ学習者も楽しいんだと思えるようになりました。自分の国・町・家族を紹介する回では話したくてしかたがない気持ちが溢れていました。

Cさん:『できる日本語』を使うことの良さは、人への共感や思いやる気持ちが無所に組み込まれているので、日本語の勉強はもちろんですが、人との関係を良好に気持ちよく生活してもらえたらと思います。

Dさん:自分で話して覚えていく、その繰り返して身につけていくのだと思いました。